

# 国際バカロレア科目「知の理論」(TOK)と教科学習の連携に関する研究

早稲田大学 修士課程  
大塚恵理子  
eriko.macheri@gmail.com

# 目次

1. 研究の目的
2. IBの概要
  - 2.1 インターナショナルスクールの歴史
  - 2.2 IB資格
  - 2.3. IBプログラム
3. TOKの概要
  - 3.1. TOKの位置づけ
  - 3.2. TOKの概念図
  - 3.3. 基本的な問いかけ
  - 3.4. 知識の分類
  - 3.5. 2つの概念ツール
4. TOKと教科学習との連携
  - 4.1. 連携の現状
  - 4.2. 先行研究
  - 4.3. 課題の確認
  - 4.4. アンケート調査
  - 4.5. アンケート結果
  - 4.6. 結果に対する考察
5. まとめ

# 1. 研究の目的

- 国際バカロレア（以下IB）の後期中等教育段階であるディプロマ・プログラム（以下DP）のコア科目「知の理論（Theory of Knowledge）」（以下TOK）と、同プログラムにおける他の教科学習との連携に関する課題の所在を明らかにし、その解決策を提案すること。

## 2. IBの概要

### 2.1. インターナショナルスクールの歴史

1924年 ジュネーヴ・インターナショナルスクール誕生



徐々に増加、戦後さらに拡大



#### **【2つの課題】**

- ①教育の位置づけ・信頼性
- ②各国大学入学資格の壁

## 2. IBの概要

### 2.2. IB資格

- 1968年 IB(International Baccalaureate) 始動
- 2015年3月7日時点で4,065校が採用しており、  
現在では国際的に認められている大学入学資格
- 注目ポイント



転載)IBOのHP

	英語圏	非英語圏
教育水準の高さ	◎	○
多文化への配慮	◎	△
大学との接続	◎	○
欧米大へのパスポート	◎	◎

- ▶ 英語圏: 学校改善や人気巻き返しのために教育パッケージとして取り入れるねらい
- ▶ 非英語圏: 欧米大学進学のための切符として活用するねらい

## 2. IBの概要

### 2.3. IBプログラム

#### ■ キーワードは **全人教育**

「探究する人」「知識のある人」「考える人」「コミュニケーションができる人」「信念をもつ人」「心を開く人」「思いやりのある人」「挑戦する人」

「バランスのとれた人」「振り返りができる人」

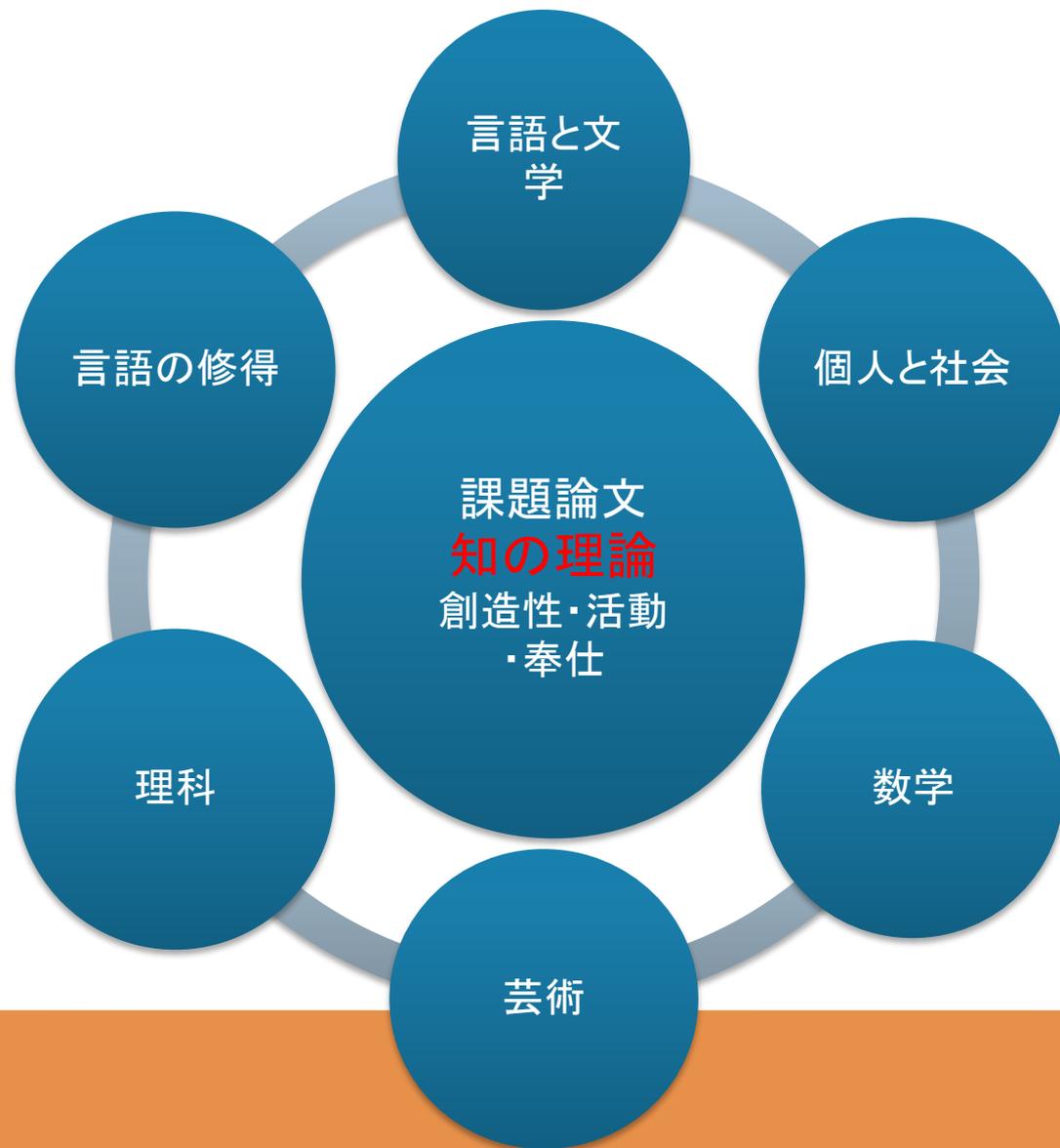
#### ■ 特徴

- ・大学入試のためではなく、生涯役立つ教育を目指している
  - ・文化や価値観の違いを認め、理解する気持ちを育む工夫がプログラムに強く反映されている
  - ・徹底的に読み、考え、自分の言葉で書き、プレゼンする
- ▶▶ □ **思考力と表現力**に重点を置く

## ■ プログラムの構成

### 【DPの場合】

- ・6グループから6科目のうち3~4教科をHL、その他をSLとして選択する。
- ・中心はIBの必修であり、教科学習で得た知識を統合することが目的。



## 3. TOKの概要

### 3.1. TOKの位置づけ

■ 新しい知識を得ることが目的ではなく、これまでの生活や教科学習

で培ってきた経験や知識を**批判的に振り返る**ことが目的。

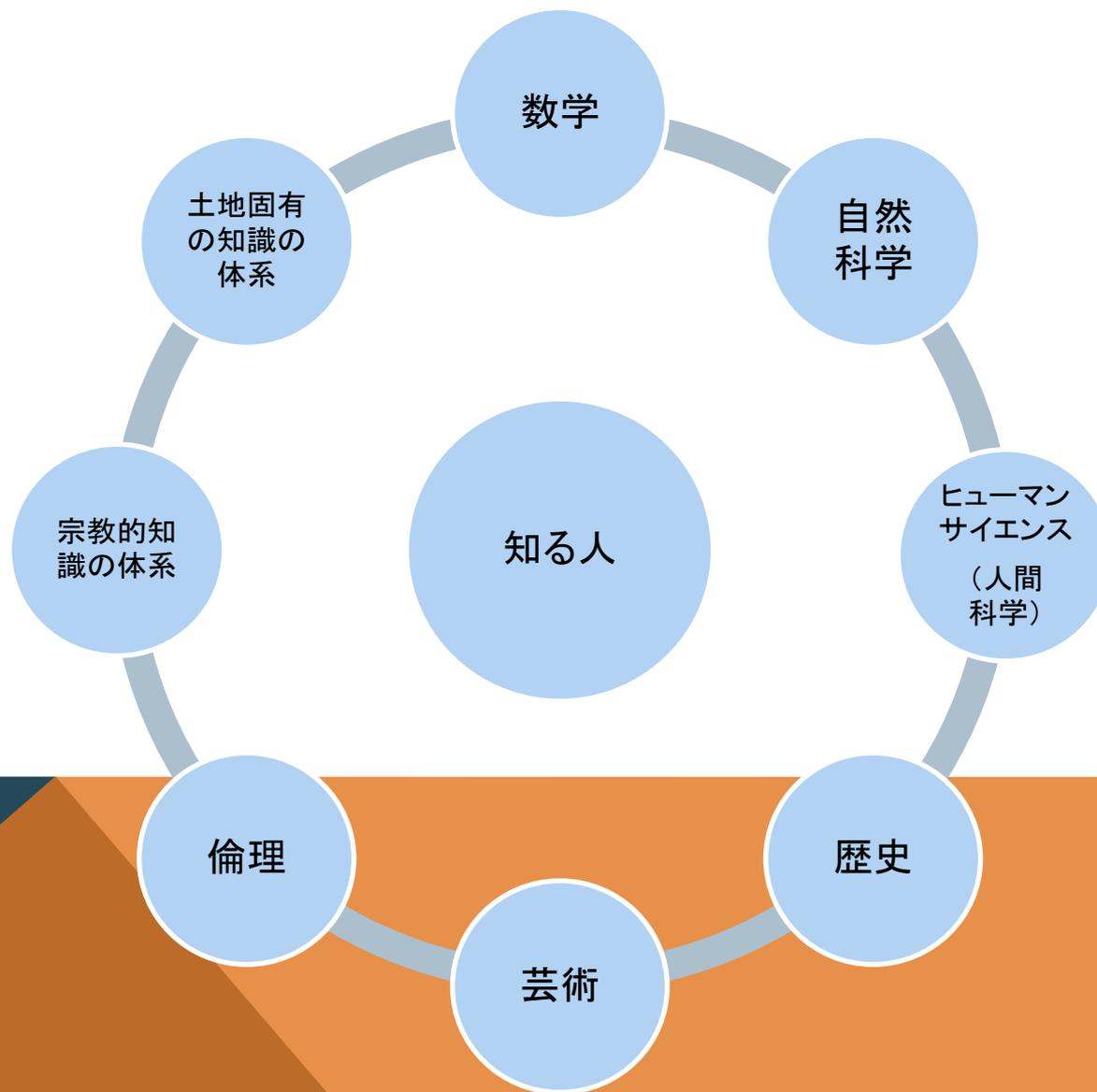
■ 学際的な観点から、教科学習で得る個々の知識体系と自己認識の地区質を徹底的に振り返る。

■ フランス・バカロレア試験の哲学がモデルだが、それとは似て非なるもの。

■ 批判的に思考するためのTOK独自の概念的ツールがある。

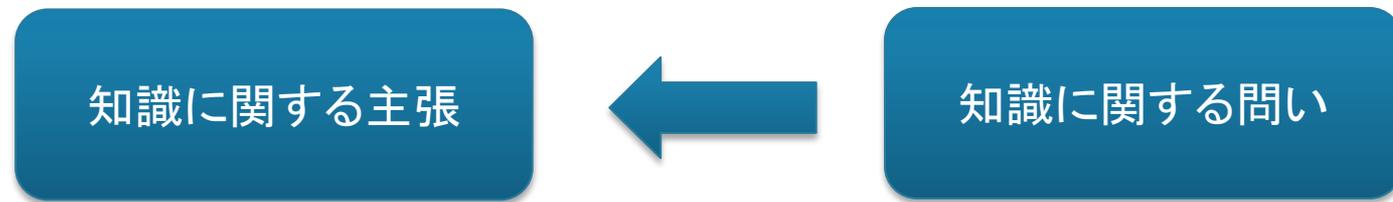
# 3. TOKの概要

## 3.2. TOKの概念図



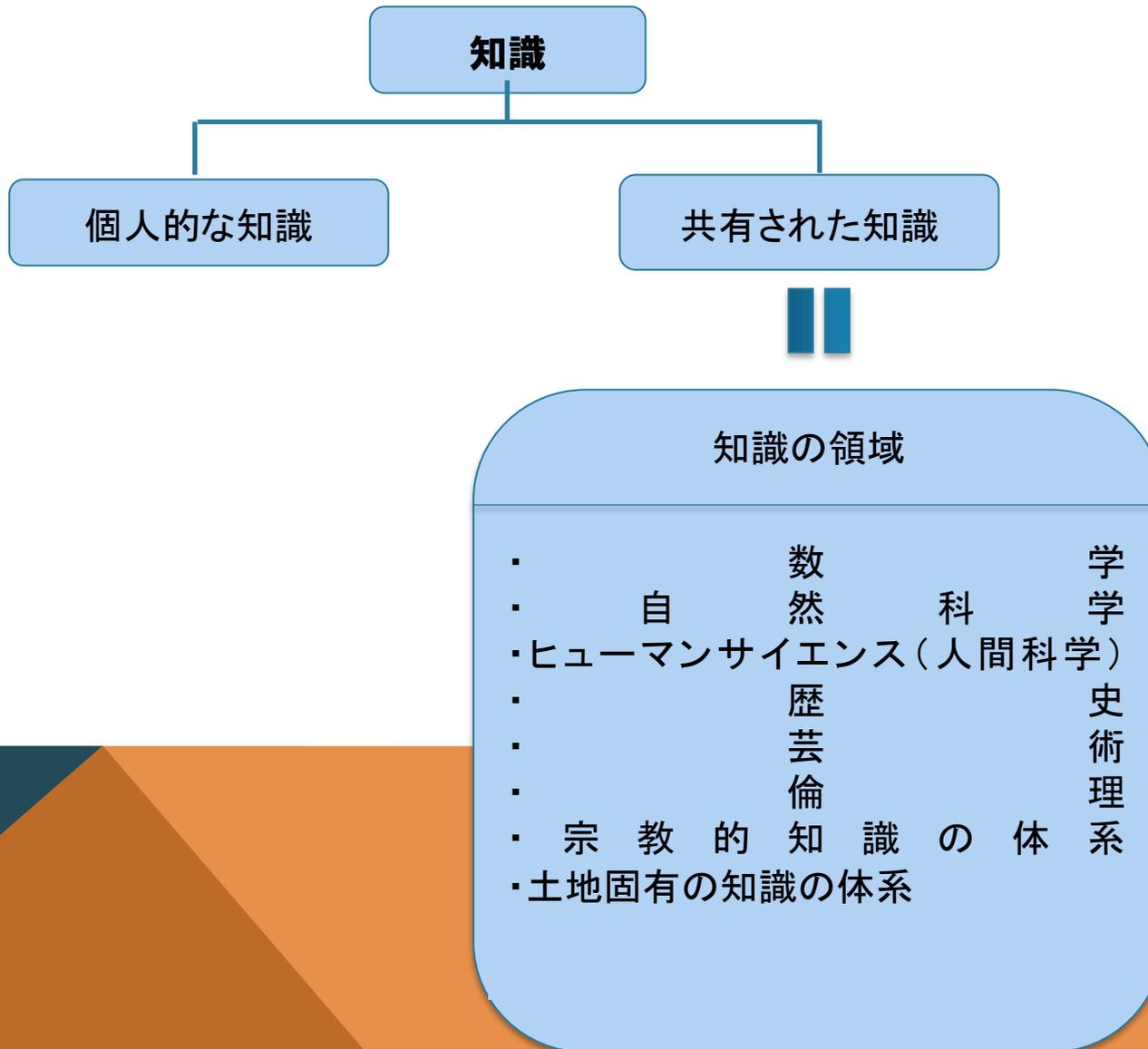
## 3. TOKの概要

### 3.3. 基本的な問いかけ



# 3. TOKの概要

## 3.4. 知識の分類



## 3. TOKの概要

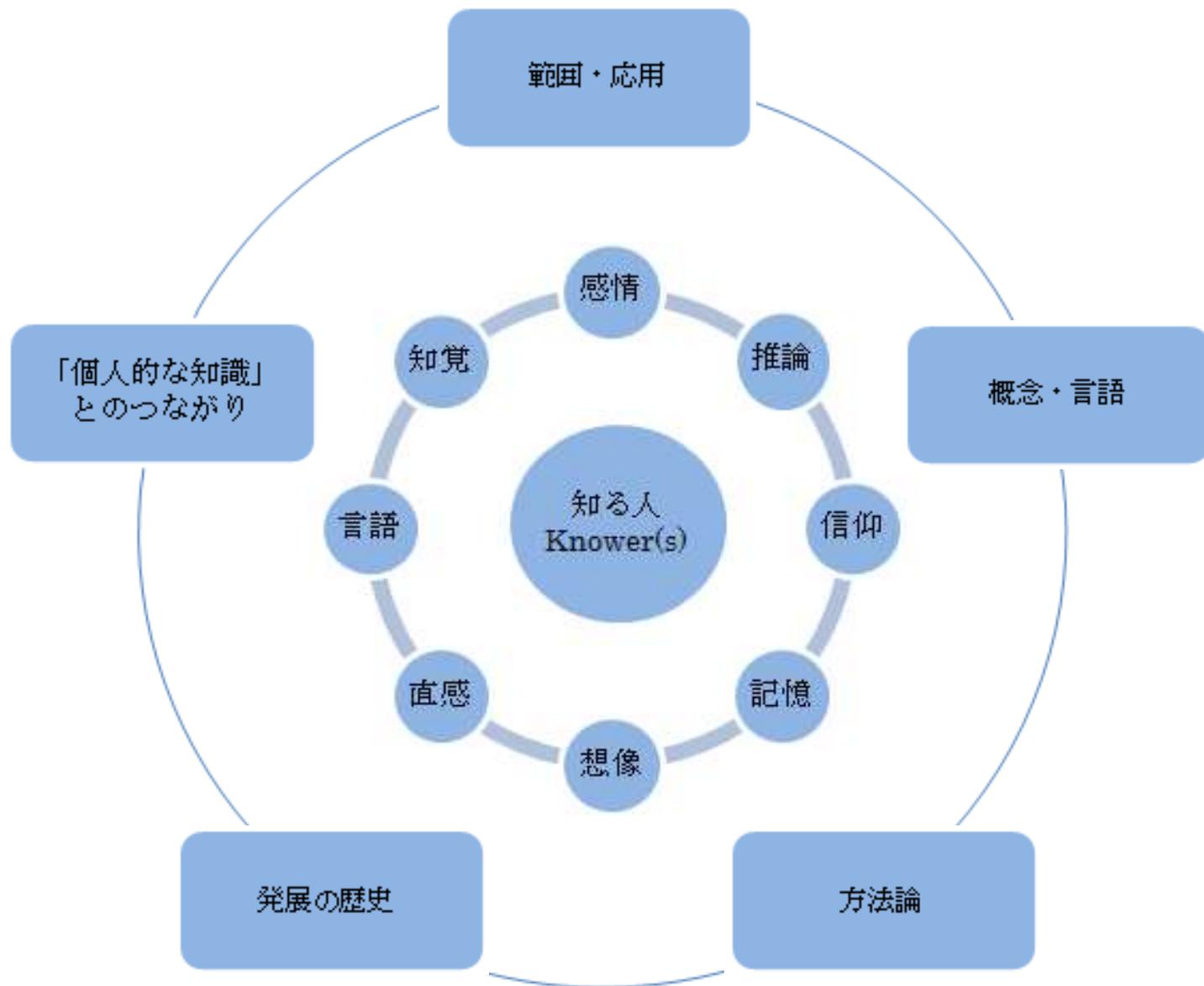
### 3.5. 2つの概念ツール

#### ■ 「知るための方法」

言語、知覚、感情、推論、想像、信仰、直感、記憶

#### ■ 「知識の領域」

範囲・応用、概念・言語、方法論、発展の歴史、  
「個人的な知識」とのつながり



## 4. TOKと教科学習との連携

### 4.1. TOKと教科学習との関係

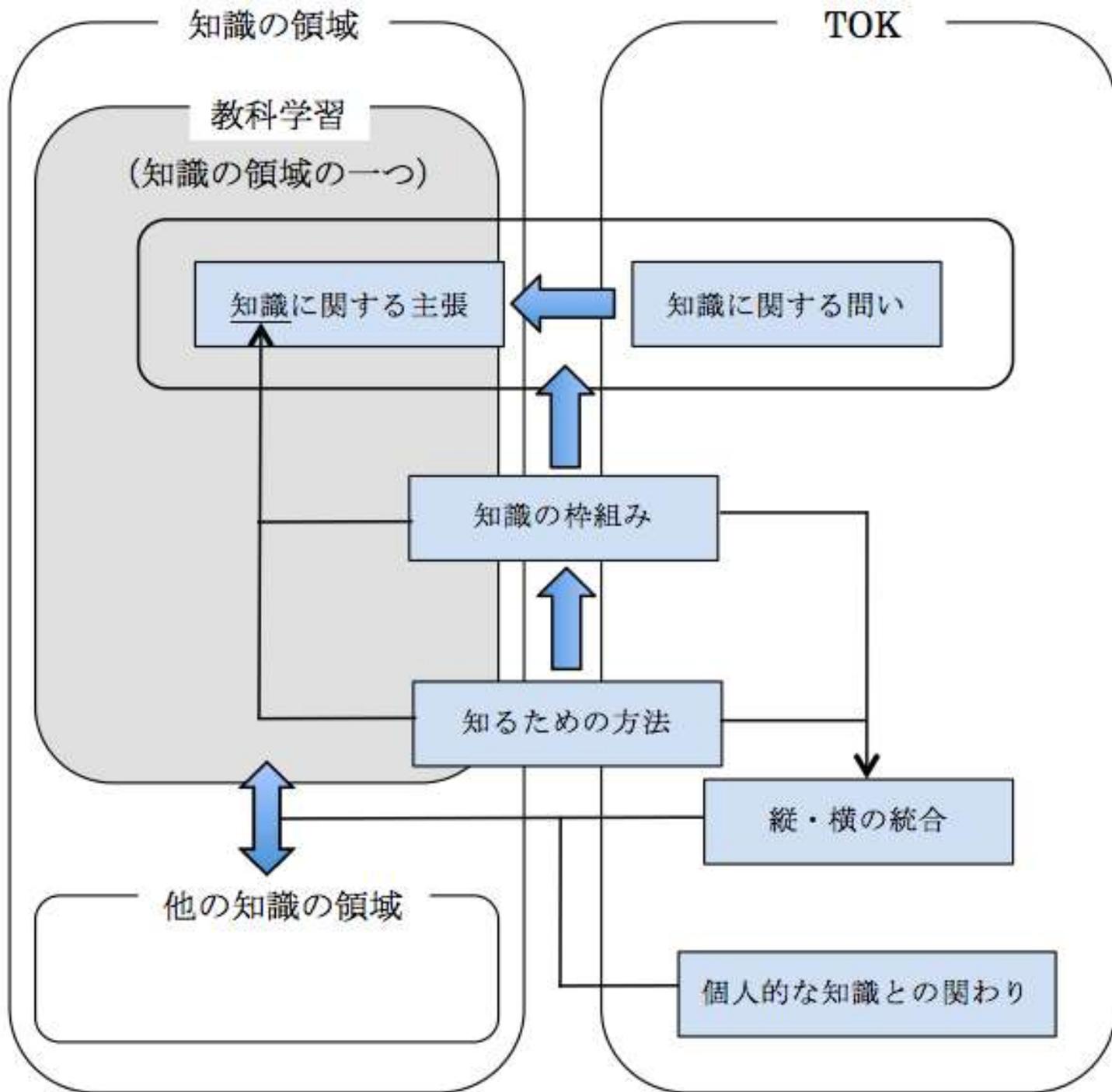
#### ■ 相互補完的な役割

「教科学習を支え、教科学習に支えられる。」

引用)IBO(2014)『TOK 指導の手引き』,p5

#### ■ 「協働設計」と「振り返り」

- ・科目間のつながりや関係性を探究し、さまざまな教科で共有されている知識、理解およびスキルを強化させること。
- ・学年縦断的および教科横断的な連続性のなかで行われること。



## 4. TOKと教科学習との連携

### 4.1. 連携の現状

#### ■ IBOの指摘

- ・TOK教師と教科学習担当教師間の“理解不足”により、連携が不十分である。

#### 【教師の意見】

- ・TOKの内容がわかりにくい。
- ・連携することのメリットがわからない。
- ・配点が低いので後回しになる。

# 4. TOKと教科学習との連携

## 4.2. 先行研究

### ■ 先行研究

- ・Zemplen(2007):「知識の領域」の優劣に関して
- ・Gan(2009):文化差とTOK
- ・Cole(2014):TOKをプログラムに統合していくことに関して
  - ①正しい認識の共有
  - ②学校全体の協力の重要性

## 4. TOKと教科学習との連携

### 4.3. 課題の確認

- “理解不足”という現状把握以上の具体的な課題点が明らかになっていない



- ・困るのは教師、生徒双方
- ・IBプログラム全体の質保証に支障を来す

# 4. TOKと教科学習との連携

## 4.4. アンケート調査

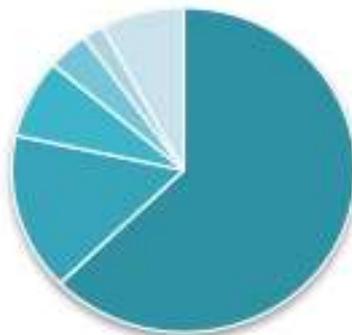
### ■ 実施時期

2014年5月～9月

### ■ 対象者

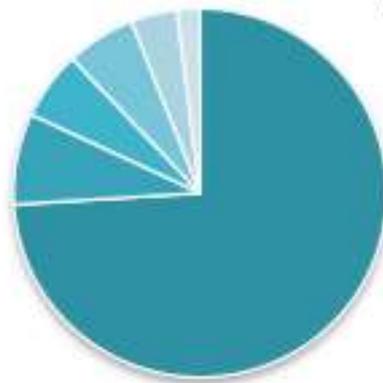
・現職IB教員50名

国籍



- 日本 32人
- アメリカ 8人
- フランス 4人
- フィンランド 2人
- ノルウェー 1人
- その他 4人

教科



- 言語A 37人
- 数学 4人
- 歴史 3人
- 経済 3人
- 科学 2人
- 生物 1人

## ■ アンケート項目

### TOKと教科学習の連携点

#### A. 協働設計

1. TOK教師と話し合いの機会を設けている
2. TOKで養われるスキルを理解している
3. TOKを自分の教科で活かしている

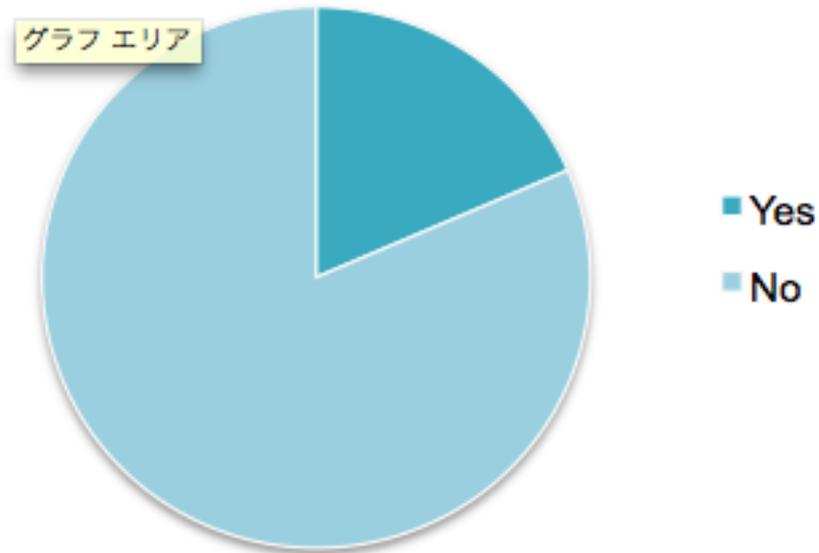
#### B. 知識の前提理解・探究

1. 「知識に関する主張」・「知識に関する問い」を取り上げる
2. 「知識の枠組み」を利用する
3. 「知るための方法」が果たす役割に触れる

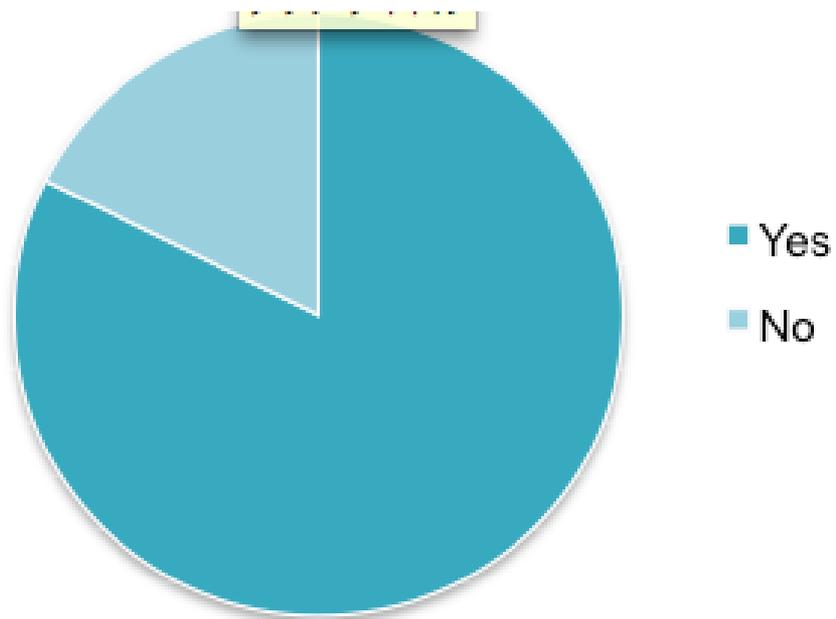
## 4. TOKと教科学習との連携

### 4.5. アンケート結果①

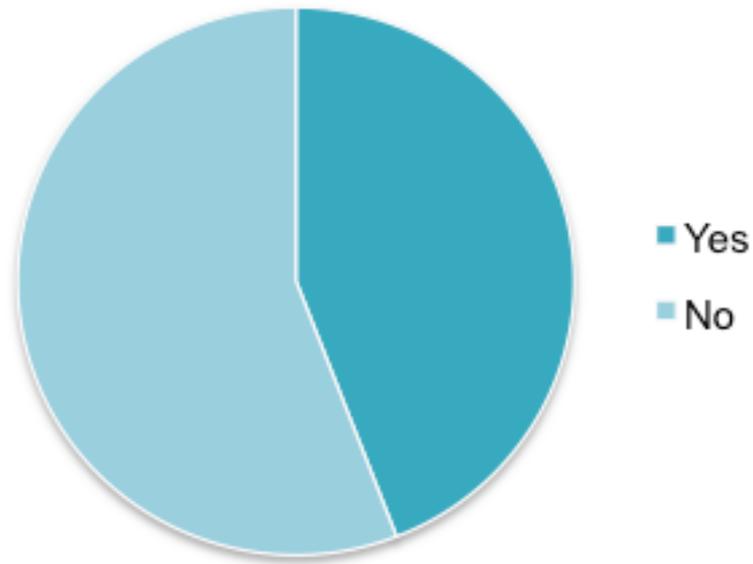
#### ■ A.1. TOK教師と話し合いの機会を設けている



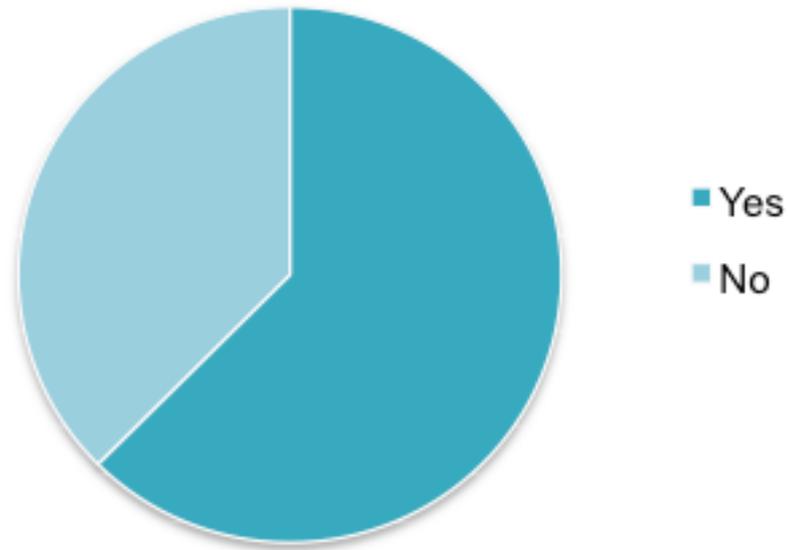
## ■ A.2TOKで養われるスキルを理解している



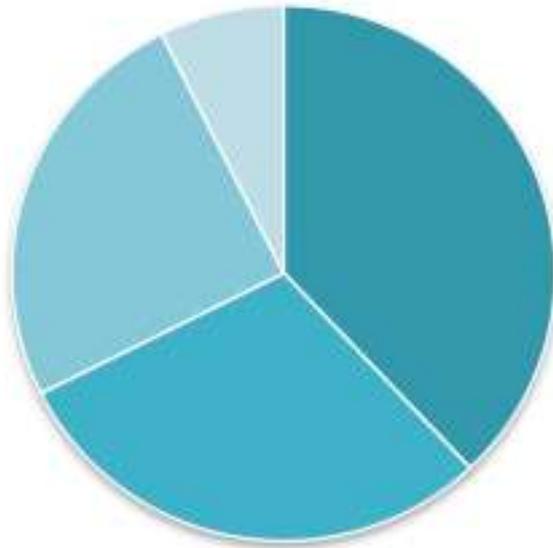
### A.3. TOKを自分の教科で活かしている



## ■ B.2「知識の枠組み」を利用する



## ■ B.2「知るための方法」が果たす役割に触れる



- 結果的に触れてはいると思うが、関係性を意識して取り上げているわけではない。
- どのような種類があるのかわからない。
- 互いの視点やものの見方の違いに気づかせるようにディスカッションを行っている。
- 生徒が話していることに教師はいつでも客観的になる必要があり、意図的に異なる視点からの話題を提供するときは「知るための方法」を意識しないと出てこない。

## 4. TOKと教科学習との連携

### 4.5. アンケート結果②

#### 【A. 協働設計】

- TOK教師と教科学習担当教師の話し合いの機会が不十分
- TOKと連携できていると感じている教師は少ない
- 教師自身の経験や文化的背景によるTOKIに対する態度の偏りがある

## 【B. 知識の前提理解・探究】

- 「知識に関する主張」や「知識に関する問い」をはじめ「知識の枠組み」、「知るための方法」等が既に教科学習と連携しているにも関わらず、教師がそれを自覚していない。
- 「知るための方法」が授業内で取り上げられているケースは少ない。

## 4. TOKと教科学習との連携

### 4.6. 結果に対する提案

#### 【A. 協働設計】

##### ■ TOK教師と教科学習担当教師の話し合いの機会が不十分

- ▶□教師に依存せず、TOKと教科学習が既に連携している点をTOKのツールや用語に置き換えて教科書に示すことで、教師の自覚的な態度を促す。

##### ■ TOKと連携できていると感じている教師は少ない

- ▶□“前提確認”など曖昧にせず、教科学習と関連する「知るための方法」「知識の枠組み」を扱うことを意識する。つまり、ツールを把握する。

##### ■ 教師自身の経験や文化的背景によるTOKに対する態度の偏りがある

- ▶□“学問的誠実性”が西洋文化の影響を受けていることは事実。それを認めつつも、TOKで扱われる概念は普遍性を持つことを伝える。

## 【B. 知識の前提理解・探究】

■「知識に関する主張」や「知識に関する問い」をはじめ「知識の枠組み」、「知るための方法」等が既に教科学習と連携しているにも関わらず、教師がそれを自覚していない。

▶□“新しく取り入れる”ではなく“既にあるものを特定する”ことに重点を置く。

特定する・・・自教科のテーマに近いツールを見極める。

取り入れる・・・ディスカッション等で、異なる観点をを用いる時に使用する。

■「知るための方法」が授業内で取り上げられているケースは少ない。

▶□意図的に異なる観点からの話題を提供する際に有効。「知るための方法」を用いたディスカッションを教師が経験する機会を。

## 5. 今後の課題

- 授業観察からの分析の必要性
- 教員研修が果たしている役割の分析の必要性
- TOK教師、生徒へのインタビューの必要性
- TOKと連携している教科とそうでない教科の学習成果の  
違いの分析の必要性

# 参考文献

- D. Cole Baker(1965), “Towards an International University Entrance Examination”, *Comparative Education, Vol.2, No.1 November*, Routledge.
- David A Cole, Susanne Gannon, Dr. Jacqueline Ullman, Paul Rooney (2014), IB Programme: Theory of Knowledge(TOK): Exploring Learning outcomes, benefits and perceptions/ Prepared for the International Baccalaureate Organization: Final Report.
- Gan, A.(2009), ”Chinese students’ adjustment to the International Baccalaureate Diploma Programme”, *Journal of Research in International Education,8 (3)*, pp283-304.
- Zemplen, G. A. (2007), “Conflicting agendas: Critical thinking versus science education in the international Baccalaureate Theory of Knowledge Course”, *Science & Education, 16*, pp167-196.
- IBO(2014)『TOK 指導の手引き』
- 『国際バカロレアの教育とは?』
- 『プログラムの基準の実践要項』
- 『TOK 教師用参考書』
- 『DP 原則から実践へ』